

2020.9.20 年間第 25 主日

のこりの恵み

マタイ福音書 20 章 1-16

(そのとき、イエスは弟子たちにこのたとえを語られた。)「天の国は次のようにたとえられる。ある家の主人が、ぶどう園で働く労働者を雇うために、夜明けに出かけて行った。主人は、一日につき一デナリオンの約束で、労働者をぶどう園に送った。また、九時ごろ行ってみると、何もしないで広場に立っている人々がいたので、『あなたたちもぶどう園に行きなさい。ふさわしい賃金を払ってやろう』と言った。それで、その人たちは出かけて行った。主人は、十二時ごろと三時ごろにまた出て行き、同じようにした。五時ごろにも行ってみると、ほかの人々が立っていたので、『なぜ、何もしないで一日中ここに立っているのか』と尋ねると、彼らは、『だれも雇ってくれないのです』と言った。主人は彼らに、『あなたたちもぶどう園に行きなさい』と言った。夕方になって、ぶどう園の主人は監督に、『労働者たちを呼んで、最後に来た者から始めて、最初に来た者まで順に賃金を払ってやりなさい』と言った。そこで、五時ごろに雇われた人たちが来て、一デナリオンずつ受け取った。最初に雇われた人たちが来て、もっと多くもらえるだろうと思っていた。しかし、彼らも一デナリオンずつであった。それで、受け取ると、主人に不平を言った。『最後に来たこの連中は、一時間しか働きませんでした。まる一日、暑い中を辛抱して働いたわたしたちと、この連中とを同じ扱いにすることは。』主人はその一人に答えた。『友よ、あなたに不当なことはしていない。あなたはわたしと一デナリオンの約束をしたではないか。自分の分を受け取って帰りなさい。わたしはこの最後の者にも、あなたと同じように支払ってやりたいのだ。自分のものを自分のしたいようにしては、いけないか。それとも、わたしの気前のよさをねたむのか。』このように、後にいる者が先になり、先にいる者が後になる。」

説教

コップに半分の水が残っています。これをまだ半分残っていると思うか、あと半分しか残っていないと思うか、さてあなたはどっち派でしょうか。

きょうの福音はまるまる一日働いて1デナリの人、1時間しか働かないのに同じように1デナリ支払う雇い主に文句をいうという内容です。暑い中、一日中働いた人の言い分はもっともですが、雇い主は自分の勝手だ、わたしは約束は守っているとはねつけています。

なんとも理解しにくい喩え話ですが「後にいる者が先になり、先にいる者が後になる。」とまとめられて福音は終わります。

福音の喩えは1デナリというお金に喩えた話ですが、デナリを「恵み」に置き換えてみるとどうなるでしょうか。一日中働らくことができた、一時間しか働くことができなかった、でも恵みとしては同じように「一恵み」あげようと雇い主がいつているという置き換えです。そう考えてみると一日働くことができた人は文句をつける筋合いではなくむしろ感謝したほうがいいのではないかとも思えます。一時間しか働けないのに比べるとオレはまるまる一日も働けたんだ。さっきのコップに残っている半分の水でいえば、あと一日分も働ける、あと一時間しか働けないという置き換えができそうです。

ところで、喩え話では働く人は朝からだけでなく、9時と12時と、3時と5時の4回ほど働く人を雇っています。9,12,3時のグループはいちいち福音では説明されていないので勝手に想像してみましよう。9時組は朝から組と同じようにもうちょと色をつけてもいいだろう、オレたちだって長い時間働いたんだ、とか、3時組はよかったよかった、まさか1デナリももらえるとは思わなかった、でも1時間しか働かない奴らがいたので表立つことはなかった、とばっちりが来る前にさっさと逃げようとか、思っているかもしれせん。

わたしもそうですが、日本のキリスト教事情でいえば多くのクリスチャンは

朝から丸一日働いて1デナリグループではなく、途中からのグループに当てはまるでしょう。自分は何時組になるのだろうと振り返り、いままでの恵みを思い返し、コップに残されている半分の水のように、残っている恵みに思いを巡らせてみましょう。
